

工学部研究資料館発掘調査成果の現地説明会の開催について
発掘された近代赤レンガ建造物～考古学から明治時代の建築技術を探る～

(ポイント)

- 工学部研究資料館(国指定重要文化財)の建築初期の遺構群発見
- 建物の外壁、柱、板床面の構造的な関係性が考古学的に明らかに
- 国指定重要文化財の考古学的調査例はまれで、全国的に注目されている近代化遺産群の保存・活用に向け画期的な発掘調査となる

(概要説明)

工学部研究資料館とは

熊本大学工学部(旧熊本高等工業学校)機械実験工場で、明治41年(1908年)に竣工した桁行34.6m、梁間14.7mのレンガ造りの建物。内部の東側3/4は機械実験室で、西寄りにボイラー室と蒸気機関室が設置され、1970年まで実験工場として利用されました。1994年、11台の工作機械とともに技術的に優秀な建造物として国の重要文化財に指定されています。

調査の背景

熊本大学埋蔵文化財調査センターは、熊本地震で被災した工学部研究資料館の復旧工事に伴う発掘調査を進めています。この場所は黒髪町遺跡群(縄文時代～江戸時代)の範囲内に位置し、当センターは文化財保護法に基づいた埋蔵文化財発掘調査を実施することとなりました。発掘の予備調査で発見されたいくつかの玉石群は、板床を敷いていた建築当時の床下

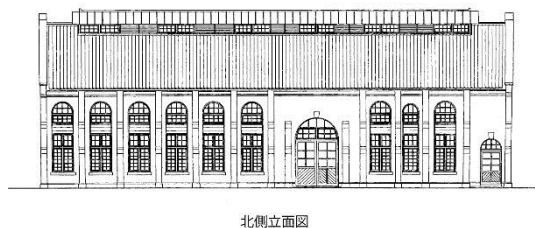
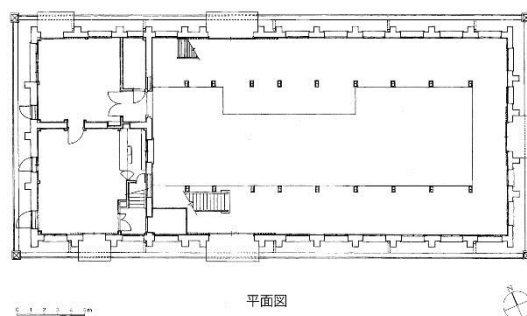


図1 工学部研究資料館の平面図(上)と北側立面図(下)



図2 床下基礎の検出状況(整然と並んだ玉石群)

基礎であった可能性が高いとの指摘がありました。そこで、現状のコンクリート床直下に堆積した土壌面を丁寧に調査し、詳細な記録を行うこととなりました。

調査の内容と成果

発掘では、土の堆積状況と建物の構築過程の関係を調べるために、土層を観察しながら調査を進め、図や写真による記録を行っています。

建物内の発掘を進めた結果、レンガ壁のコンクリート基礎を埋め込むための溝が建物の外周を廻る様子や板床の玉石群（基礎）が整然と並んだ状況が確認され、レンガ造建物の建築技術や一連の建設工程が一部明らかになりました。また、大型で重い工作機械を設置するためのコンクリート基礎、根太（※1）や大引き（※2）を設置する床組の痕跡も確認され、本資料館の建築初期を知る上で重要な証拠が得られました。これらの発見状況も詳細な記録が行われています。

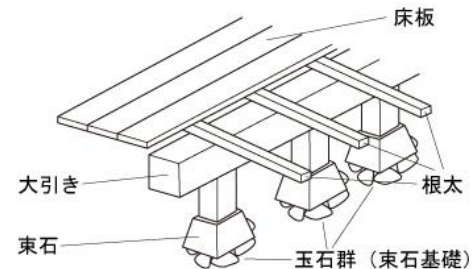
今後の展開

現存する工作機械（国指定重要文化財）や当時の写真記録などの関連資料は実験工場の様子を今に伝えていますが、本発掘調査の成果はそれを考古学的に裏付け、近代の建築技術を知る上で重要な情報を提供してくれます。国指定重要文化財である建物地下の発掘調査は希少な事例で、出土品や調査の記録は文化財的価値が高い建造物の修理や復元整備に欠かすことができない基礎資料となります。

用語解説

※1 根太：床板を支えるため床板下に直角方向に敷いた水平材

※2 大引き：床板および根太を支える横材



参考図 床組構造説明図（イメージ）

関連文献

熊本大学 60 年史編纂委員会（編） 2014『熊本大学 60 年史 通史編』国立大学法人熊本大学

現地説明会の開催について

文化財の災害復旧に携わる関係者との情報共有を図るため、熊本大学埋蔵文化財調査センターは、下記の日程で発掘調査成果の現地説明会を開催します。

場所:熊本大学黒髪南キャンパス 工学部研究資料館内

日程:令和元年6月29日(土) 午前10:00~12:00

※当日は現地集合(午前9:30より南キャンパス西側ゲート(赤門向かい)を開放していますので、車での来場ができます)。参加人数30名程度を想定し、1班約10名の編成で、調査写真・出土遺物の解説(工区外)を20分程度、遺構検出状況の説明(建物内)を20分程度行います。

災害復旧工事中の建造物内での説明会となりますので、安全上の問題から参加対象者を文化財保護関連業務関係者、建築・土木関係者・マスコミ関係者に限定しています。情報公開後も一般の方々の現地見学はできない旨報道下さいますようお願い申し上げます。

【お問い合わせ先】

熊本大学埋蔵文化財調査センター

担当：新里(しんざと)・士野(しの)

電話：096-342-3832

e-mail:maibun@jimu.kumamoto-u.ac.jp